

2023年1月22日 説教「主のことばのとおり」

列王記第二7章12～20節

ツアラアトスに冒された4人はアラムの陣営に行って、もぬけの殻であるのを見て、残された食べ物を頬張りました。金、銀も隠したのですが、悪い事であると認め、それを明け方に王の家に報告しました。

1. 4人の報告を受けて(12～13節)

- ①王の判断(12)「王は夜中に起きて家来たちに言った。『アラムが私たちに對して計ったことをあなたがたに教えよう。彼らは私たちが飢えているのを知っているので、陣営から出て行って野に隠れ、あいつらが町から出て来たら、生けどりにし、それから町に押し入ろう、と考えているのだ。』」ツアラアトに冒された者達からの報告を受けた門衛たちは、それを王の許に伝えます。まだ夜が明けない時間ではありますが、王は起き上がって家来たちに言ったのです。『これはアラム軍の策略だ。彼らは我々が飢えているのを知って、陣営から出て、野で待ち構えているのだ。我々が町から出て行ったらば、そこで生け捕りにして、この町を押し入ろうという作戦なのだ』と言って、ツアラアト達の報告を正面からは受け止めません。これは王のプライドか、それとも王の冷静な判断か。
- ②偵察の提言(13)「すると、家来のひとりが答えて言った。『それでは、だれかにこの町に残っている馬の中から五頭だけ取らせ、その者たちを遣わして偵察してみましよう。どうせ彼らはこの町に残っているイスラエルの全民衆と同じめに会い、または、すでに滅ぼされたイスラエルの全民衆と同じめに会うのですから。』」これを受けて、家来の一人が答えるのです。『それでは何人かを偵察に遣わしたらどうでしょう』というのです。兵士たちが残っている馬の中から五頭だけを連れていけば、『相手方がどのような手に出るかがわかるでしょう。王の予想通りなら、偵察に出た者たちは、ひとたまりもなくやられてしまうでしょうから』と王の意見を入れながら、進言したのです。

2. 偵察報告とその結果(14～15節)

- ①偵察命令(14)「彼らが二台分の戦車の馬を取ると、王は、『行って、偵察して来なさい。』と命じ、アラムの陣営のあとを追わせた。」馬に引かれた戦車が二台。偵察隊はこれに乗って、命ぜられるままに出発しようとしています。一台に2～3人とすれば、4～5人でしょうか。彼らはアラムの陣営がある方向へ向かいます。王としても、実のところは何もわかっていなかったわけですから、この偵察隊の報告を待つばかりです。
- ②至る所に衣服や武具が(15)「彼らはアラムのあとを追って、ヨルダン川まで行った。ところが、なんと、道は至る所、アラムがあわてて逃げるとき捨てていった衣服や武具でいっぱいであった。使者たちは帰って来て、このことを報告した。」彼らは、いつ何時、敵の軍が来ても良いように、その時の対策も立てて行ったでしょう。でもアラムの陣営に着くまで、相手方の姿は見られません。彼らのあとを追って、ヨルダン

川まで行ったのですが、その道には、至るところにアラム軍があわてて逃げ出し、荷物になって捨てた物や衣服、武具までもあったというのです。これはまさに、ツアラアトの人々が報告した通りで、アラム軍の策略ではないようです。その様子を彼らは王たちに報告したのでした。

- ③小麦粉などが安価に (16) 「そこで、民は出て行き、アラムの陣営をかすめ奪ったので、主のことばのとおり、上等の小麦粉一セアが一シェケルで、大麦二セアが一シェケルで売られた。」その報告を受けた民たちは行って、アラム陣営が残した物をかすめ奪ったのです。その中には、上等の小麦粉も大麦もありました。それは、エリシャを通して、主が語られた言葉の通りになったのです。つまり、小麦粉は一セアが一シェケル。大麦が二セア一シェケル。飢饉の中では考えられない安価でした。

3. 預言の成就 (16~20 節)

- ①侍従の死 (17) 「王は例の侍従、その腕にお寄りかかっていた侍従を門の管理に当たさせたが、民が門で彼を踏みつけたので、彼は死んだ。王が神の人のところに下っていったときに話した神の人のことばのとおりであった。」さて、イスラエルの王は、彼の身の周りの世話をしていた侍従を門の管理に当らせました。7章 1, 2節に出て来る人です。ところが、何と彼は食糧を求めて暴徒化した民によって踏みつけられ死んでしまったのです。それは王と侍従がエリシャの所に行った時に伝えられた厳肅なお言葉の実現でした。

- ②侍従の不信仰 (18~19) 「神の人が王に、『あすの今ごろ、サマリヤの門で、大麦二セアが一シェケルで、上等の小麦粉一セアが一シェケルで売られるようになる』と言ったとき、侍従は神の人に答えて、『たとい、主が天に窓を作られるにしても、そんなことがあるだろうか。』と言った。そこで、彼は、『確かに、あなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることができない。』と言った。」エリシャが王に、その前日に預言していました。つまり、今日には、サマリヤの門で大麦二セアが一シェケル、上等の小麦粉一セアが一シェケルで売られると。これは飢饉の真ただ中では、思いつかないような安値でした。なにしろ普段は人が口にしないロバの頭一つが銀八十シェケルもしたのですから。その時に、王と共にいた侍従は、預言を信ぜずに「たとい、主が天に窓を作られるにしてもそんなことはない」と言ったものでした。

- ③預言の成就 (20) 「そのとおりのことが彼に実現した。民が門で彼を踏みつけので、彼は死んだ。」侍従は現実主義で、信仰でした。エリシャを通して、厳しい預言の言葉をもらっていました。『確かにあなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることができない』。実際に、彼は食糧が安価になっているのを確認しました。しかし、民による暴力を受け、命を落としてしまったのです。主を侮ったことの結果でした。

《結論》

7 章は1節において、エリシャが語った預言で始まりました。「あすの今ごろ、サマリヤの門で、上等の小麦粉一セアが一シェケルで、大麦二セアが一シェケルで売られるようになる。」これを聞いていたのは、イスラエル王と侍従でした。その時に、侍従が答えたのです。「たとい、主が天に窓を作られるにしても、そんなことがあるだろうか」。確かに、置かれていた状況からすると、この侍従の答えは常識的でした。なにしろ飢饉が進み、母がその娘の肉を食べというほどに、極限状態にあったからです。売られている食料も高騰し、ろばの頭一つが銀八十シェケル、燃料である鳩の糞四分の一カブが銀五シェケルに跳ね上がっていたのです。そんな事態のなかで、人々の胃の腑に、パンなどになる上等な小麦粉1、7リットルが銀一シェケルで売られるようになるという預言は極端な価格が安くなるという預言だったのでした。

ところが、事は意外な展開をしていきます。エリシャの預言が成就するので。突破口を作ったのはツアラアトに冒された4人でした。彼らから報告を受けた王は部下たちを偵察に送ります。その結果、アラム軍が逃げ出し、食糧や財が残されていることを確認され、事は一気に動きます。アラム軍が陣営に残していった大量の食糧が、サマリヤの門周辺で売られるようになったのです。

エリシャの預言を、そんなことが起こる筈がないとした、侍従は命を落としました。マラキ書3章10節には『わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福を、あなたがたに注ぐかどうかためしてみよ』とあります。天の窓が開かれて、民に食料が備えられたのです。主の圧倒的な御手はここでも伸ばされたのです。ある人は、アラム軍が残した食料もすぐに無くなってしまおうというかもしれません。しかし、そのように予測するよりも、備えてくださったことを感謝することが大事でありましょう。

預言を信じなかった侍従は事故死しました。「聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったからです。」(Ⅱペテロ 1:20—21)。侍従は素直に預言の言葉を受取るべきでした。人間の予測を第一にしました。神の御力を軽視しました。それは、主を侮ったということになります。食料のことも、侍従のことも主のことばのとおりになりました。

それでは、私たちはどうでしょう。御言葉の約束を、素直に受けているでしょうか。謙遜に御言葉から教えられようと心を開いているでしょうか。主のことばのとおりにはなると信じているでしょうか。『わがのぞみは消えゆくとも、主よ、みこころ、なさせたまえ』(讚美歌 365 の2節)とあるように、人間的には希望が持たず、涙が袖にかかるような状況が続いているとしても、主のお約束を信じましょう。「わたしがあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。主の御告げ。それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」(エレミヤ書 29:11)